



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Max Weberと科学：価値自由と合理性の世界観 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	坂, 敏宏
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12040号
Issue Date	2015-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60486
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Toshihiro_Saka_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 坂 敏 宏

審査委員	主査	准教授	田 口	茂
	副査	教 授	藏 田	伸 雄
	副査	准教授	宮 嶋	俊 一
	副査	名誉教授	高 幣	秀 知（北海道大学）

学位論文題名

Max Weber と科学：価値自由と合理性の世界観

本論文は、Max Weber によって残されたテキストの中で展開されている、社会科学の基礎的な方法論に関する議論に焦点を当て、彼の社会科学的方法論の根底に横たわる哲学的基盤を探ろうとするものである。その際、本論文は、Weber に仮託して自らの立場を語るようなスタンスを斥け、Weber 自身のテキストに徹底して立ち戻るという方法を採用している。Weber の方法論の最重要概念とも言える「価値自由」の概念が Weber のテキスト中に現われる箇所を逐一検討することによって、先行研究と批判的に対峙しつつ、Weber 自身の表現に即して彼の方法論の基礎を解明している。さらに、社会科学の方法の確立においても、それにもとづく社会的出来事の分析においても重要な役割を果たしている「合理性」の概念を検討し、合理性を準拠枠とする Weber 自身の科学的認識に対する姿勢を論じている。これらの作業を通じて、本論文は、Weber が自らの社会科学、さらには科学一般をどのように捉えていたのか、科学的認識を通じた彼の世界観はどのようなものだったのかを解釈している。そこでは、科学がヨーロッパというローカルな社会において成立したという出来事そのものを、そこで成立した科学的方法によって認識するという、いわば科学の再帰的な自己認識という図式が中心的な論点になる。

Max Weber については数多くの先行研究があり、多様な解釈が展開されてきた。とりわけ日本においては、Weber の「価値自由」の概念に「価値からの自由」という方法的意味のみでなく「価値への自由」という実践的意味が込められているという解釈が広まっているが、本論文は Weber 自身のテキストに立ち戻って、wertfrei および wertungsfrei という語が用いられている箇所を網羅的に検証し、これらの語に実践的な価値選択の自由という意味が込められている箇所が存在しないことを実証している。これに対し、Weber が wertfrei という語に直接関係づけない仕方ですべて「価値への自由」について論じている可能性はあるが、この点に関して、本論文は「価値への自由」または「一つの価値を自由に選び取る」という認識における手続き的な概念は、「価値自由」にではなく、むしろ「価値関係づけ」に結びつけられるべきだということを、やはりテキストにもとづいて示しており、ありうる反批判にも答えている。また、しばしば Rickert に由来するとされてきた「価値自由」の概念が、Münsterberg に由来することを同じくテキスト的に論証した点も、本論文の重要な成果と言える。この点は先行研究においてもほとんど論じられておらず、「価値自由」概念の生成をその源泉から辿り直し、その意味を理解する上で、非常に重要な発見である。さらに、「合理性」概念に関しても、テキストを綿密に精査して Weber におけるその意義を考察している点は評価できる。総じて、「価値自由」および「合理性」概念についてのテキストにもとづく実証的な研究を通し、Weber の科学論について論じるための一つの切り口を呈示した点で、Max Weber 研究の進展に一定の寄与を果たしていると評価できる。

審査委員会は、上記のような本論文の研究成果を重要な成果として評価する点で一致したが、「価値自由」について論じた第二章と比べ、「合理性」概念について論じた第三章、Weber の科学観について論じた第四章の内容の展開が十分でない点を指摘した。「合理性」に関しては、特に「理念型」の概念をもっと詳細に論じるべきである。また、「合理性」概念の普遍性と特殊性、科学の

普遍的側面と文化的側面については、その矛盾やそこに含まれる再帰的關係が指摘されるにとどまっており、それについての独自の解釈の展開が見られない。これは、テキストのみによって Weber の思想を語ろうとしたアプローチの限界であるかもしれないが、当該の議論の一貫した展開という点から見ると、不満が残る点である。Weber が「価値自由」概念に込めたある種のパトス的なものが全く論じられていないことも、上記と同様の限界によるものであろう。しかし、このような問題点は、テキストのみに即して「Weber が実際に何を言ったのか」を厳密に検証するという本論文の方法論が、その成果の反面、抱え込まざるをえない問題点であるとも見ることができ、本論文の学術的意義を損なうものではない。以上の審査結果にもとづき、本審査委員会は、全員一致で、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。